

ミュージカル劇団ケセラセラ「今やらな、いつやるねん」

去年も講評を書かせて頂いたが、同じ講評を再びここに記載しても許されるのではないかわせる雰囲気がこの劇団にはある。それはこの劇団が文字通り全てを許しているように思えるからである。彼らの心意気は昨年同様、目指すは「松竹新喜劇」。私はここで、敢えて新喜劇を目指す集団について考察する醜態を曝すのが、この構図自体がとても滑稽だとも私は思う。

今作品は「ありのまま」の独唱で始まり、「ありのまま」の独唱で終わる。歌っているのは劇団の代表と思われる方だ。その方が身を持って「ありのまま」を肯定している。ここまでストレートになれるのはどういうわけだろうか。全てを許すような姿勢は、作品の随所に見られた。開演挨拶でも「温かい心で見守ってね」といった言葉が観客に対して投げかけられた。実際に上演中何度かミスが起こったが、その度に観客は大きな笑い声を上げた。間違いを歓迎する姿勢が観客席には出来上がっていたのである。

この劇団の全てを許すような姿勢は、開演前から流される「ケセラ・セラ」や開演挨拶での言葉によって醸成されたものだろう。そうした観客への細かな心配りの事を「おもてなし」と呼ぶ事は可能だろう。昨今、作品創作のみに集中するあまり、そうした「おもてなし」を疎かにしてしまう劇団が多いように私は感じる。しかしお笑いというジャンルに於いては、観客と作り手の関係性が一般的な演劇作品以上に直接的である為だろうか、

「おもてなし」を重視する集団は実際多いように感じる。全てを許すような底知れぬ愛で、観客はもちろん、自分たちをも包み込んでいるミュージカル劇団ケセラセラ。その包容力は彼らの強みであると同時に、これからの課題となるかもしれない。しかしそれを課題とも思わない振りができるのが、松竹新喜劇を目指すミュージカル劇団ケセラセラである。彼らはすべてが「なるようになる」という事をよく知っている。愛すべき小癪な集団なのである。

伊藤 拓（演出家）

ミュージカル劇団ケセラ・セラ

加藤小夜子（劇団京芸）

まず、観客動員にあっぱれ。客を味方にしてこれでもかのやりたい放題（良くもわるくも）。

せっかくのマイクを使っただけの詞が不明瞭なところが残念。
自信のあるセリフと自信のないセリフの落差が気になりました。
各自、役の特徴を工夫してつくっている点はよかったです。

終章へのプロセスが無理矢理で、（見せたい・やりたいが先行して）台本が乱暴なのが勿体なく感じました。